

● 国際交流員とともに、成長する「NISEKO」 —— 北海道ニセコ町企画環境課

はじめに（北海道ニセコ町の紹介）

ニセコ町は北海道の南西部に位置し、基幹産業は農業と観光業で、人口は約 5,000 人の小さなまちです。

平成 13 年には、全国の自治体で初めて自治基本条例「まちづくり基本条例」を制定し、住民参加と情報共有を柱に「町民一人ひとりが自ら考え、行動することによる“自治”」を基本に「住むことが誇りに思えるまち」づくりを進めています。

平成 30 年には「SDGs 未来都市」に選定され、市街地に SDGs の理念を踏まえた新たな空間（モデル地区）を形成する取り組みを行っています。

国際交流員の活躍

ニセコ町では、国際化に対応するべく平成 16 年にクレーアの自治体職員協力交流事業（LGOTP）で、初めてオーストラリアの自治体職員 1 名の受入れを行いました。

その後、外国人観光客の増加など国際化の波が大きくなると考え、平成 23 年度より国際交流員（CIR）へ一本化。現在はドイツ、アメリカ、中国、マレーシアの 4 か国から計 5 名の CIR が活動しています。うち 4 名は役場の商工観光課へ、1 名は観光協会へ配属しています。現役も含めて今まで 17 名の CIR がニセコ町で活躍しています。

主に外国人向けの観光案内業務や誘客（自国のマーケティングレポートや、海外エージェントのファムリップサポート、SNS などによる情報発信など）を行うほか、町の広報媒体の多言語化、町内飲食店のメニュー多言語化のサポート、住民登録窓口や住民の翻訳サポートなど言語的なサポートは CIR の業務として今や必須となっています。

また、文化の情報発信として、町のコミュニティFM「ラジオニセコ」に毎週 CIR が町民パーソナリティとして出演し、ニセコでの生活の様子や母国の紹介などを行っています。



ラジオニセコでの様子（2018 年）
（ラジオニセコ Facebook より）

そのほか、新型コロナウイルス感染症の影響で、帰国できずニセコエリアで職を探す外国人をサポートするために「日本語教室」を開催、CIR の高い語学能力を存分に発揮してくれています。

「ニセコフレンズ」の設立

平成 23 年度に、ニセコ町の国際交流を推進するためにニセコ町国際交流推進協議会、通称「ニセコフレンズ」を設立しました。ここでは、CIR を中心に約 40 名の会員と町民ボランティアなどとともに、大小さまざまな国際交流事業が行われています。

なかでも、世界中の絵本数百冊が集合して、多言語読み聞かせや多言語人形劇、ワークショップやバザーなどで賑わう「絵本ワールド」は今年で 7 回目を迎えました。

第 6 回目までは、町内の施設で開催していましたが、今年は新型コロナウイルス感染症対策として、既述したコミュニティFMに協力してもらい、ラジオを通じて絵本の多言語読み聞かせを行いました。また、夏に行われている「ワールド祭り」という、従来屋外で行っていた国際文化体験イベントについても、CIR で意見を出し合い、ニセコ町を舞台にしたスマートフォンゲームを独自作成し、集まらずとも母国の文化を伝えられるように工



絵本ワールドの様子（2019年）



ワールド祭りの様子（2019年）



日本語教室の様子（2020年）

夫して開催しました。

ほかにも町内各学校での多言語読み聞かせ、母国の料理教室、母国語教室といった、CIRが自ら考えた、バラエティ豊かな国際交流事業を数多く展開しています。

多様化こそまちの魅力

町ではCIRの取り組みにより、国際交流が住民にとって身近なもの、日常的なものとして認識されつつあります。外国人住民も年々増えており、新たなコミュニティとして地域に定着してきました。

今はコロナ禍ですが、リゾート地として注目を浴びて

いるこのニセコエリアでは、今後もさらに国際化が進んでいくことが予想されます。外国人と地域をつなぐパイプ役としてCIRのような人材の充実がさらに必要になってくるでしょう。国内からの移住者も多く、価値観が多様化していることが、ニセコ町の1つの魅力でもあります。このような変化を受け入れてきた町民のみなさまの寛容性があったからこそ、まちが成長できたことを忘れてはなりません。

これからもCIRは町民のみなさまとともに「住むことが誇りに思えるまち」を目指し、活動していきます。